まとめに代えて

(1)新受験時代の中学受験

これまで述べてきた調査結果をもとに、大学受験との比較の観点を取り入れながら、新受験時代の中学受験の特徴を明らかにしたい。

まず第一に、受験生の年齢が若い。この結果、大学受験の時と比べて、受験するかしないかの決定から、受験勉強、受験校の決定、そして実際の受験にいたる受験行動において、本人の意志や努力の占めるウェートが相対的に低くなっている。

第二に、第一の特徴と対になる特徴として、上述の受験行動の各プロセスにおいて家族の果たす役割、とくに母親の役割が相対的に大きくなる。

第三に、高校受験や大学受験に際しては、中学や高校が受験指導を行ない、受験生はいわば日常の学校生活の中で受験行動を行なう。しかし、中学受験に際しては、受験生は小学校とは全く無関係なところで受験行動をとる。今の小学校では、受験勉強の指導は出来ないし、進路指導もほとんど進学塾に任せ切っている。

第四に、その結果、中学受験では進学塾が非常に重要な役割を果たすことになる。大学受験でも確かに予備校の占める位置は大きい。しかし、中学受験では、小学校は受験対策を行わないし、受験参考書も十分ではない。それゆえ受験勉強の指導の側面についても、豊富なデータに基づいた進路指導の側面についても、進学塾の地位は絶対である。今回の調査では、中学受験希望者の大半が進学塾に通い、そして頼っていた。

第五に、中学受験の受験生や母親は、予想に反し明るかった。第二部の資料にある母親や受験生へのインタビューの結果にも同様な結果が出ている。この背景には、中学受験をする子供は、成績の上位層が多く、そしてこの年令の子供ではしばしば成績上位層は何事にも積極的な傾向があること。また母親も社会＝経済的地位が高く、教育歴も高く、専業主婦であるという、まさに子育ても自分の人生を楽しむというニュー・マザーたちであることなどがあげられる。

しかし、ここでは次のようなことも指摘しておきたい。すなわち、中学受験自体をおもしろく、しかも奥が深いと感じる子供も多いということである。塾の関係者の話では、進学塾での授業は、もともと出来る子供ばかりが集まっているのに加えて、能力別クラス編成などで均一化された集団のもとで、一教科だけを教えればいい講師が、学習以外のことに煩わされることなく教えることができるという。そして、子供たちは受験という目的意識を持ち、しかも授業がおもしろいので目はきらきら輝いているという。もちろん、こうした話を鵜呑みにすることは出来ないが、私が実際に見た進学塾の生徒たちはそうした子供たちが多かった。また、調査でも子供たちの積極的・肯定的な受験観があらわれていた。

(2)新受験時代の問題点

新受験時代はすでに到来している。私立中学や国立中学を目指す父母は公立中学の画一的な教育から逃れ、多様な教育欲求が満たされることを期待する。子供も、それぞれの能力・適性に見合った教育を望んでいる。また、このようななかで良い生徒の獲得をめざした公・私立間および私立中学同志の競争は、教育の質の向上につながるかもしれない。

しかしながら、中学受験には考えなければならない問題が多い。調査結果では次のような問題を示唆している。

(1)受験勉強の実態を見ると10歳そこそこの子供に与えるにしては、中学受験の肉体的・精神的負担は大きすぎる。

(2)本人の学業成績の規定力や親の意識の規定力が強いとは言うものの、中学を受験するか否かには、親の経済力や学歴などの帰属原理が強く働いている。新たな社会的不平等の源となることはないだろうか。

(3)早くから、同質性の強い集団に通わせるということや、地域社会から離れたところへ通わせるということは、子供たちの心身の健全な発達の面からも、問題があるのではないか。

(4)12歳という、自分自身の能力も可能性もはっきりしない段階で、子供たちは母親や進学塾のひいたレールの上で将来を大きく方向づけられている。15歳あるいは18歳まで待つべきではないのだろうか。

(5)子供にとっての日常生活である小学校は、子供にとっての重大事である中学受験の問題に正面から取り組むべきではないのか。

今、中学受験は、混沌とした様相のなかで拡大化・過熱化している。そこには、タテマエがあり、ホンネがあり、商売があり、教育があり、公平があり、見栄があり、欲望があり、公正があり、おさない夢や希望がある。新受験時代は、ひとり教育界のみでなく、社会全体がとりくまなければならない新しい我々の課題である。

（樋田　大二郎）